

(2) 平成29年のトピックス

ア 平成29年 梅毒のまとめ

京都市における報告数は71例となり、過去5年間で最も多かった前年からさらに増加した。全国的にも近年は増加傾向にあり、平成29年は前年より約1,200人増加し、5年前と比較すると6倍以上の報告数となっている。京都市、全国共に5月以降に報告数が若干増える傾向がみられた。

性別内訳は、男性38例、女性33例であった。男性は、過去5年平均値(平成24年から平成28年まで)との比が2.64、前年比が1.36、女性は過去5年平均値との比3.75、前年比1.43で特に女性の報告数が増えた。

年齢階級別では、10～19歳が2例、20～29歳が32例、30～39歳が19例、40～49歳が8例、50～59歳が7例、60歳以上が3例となっており、特に20歳代の女性の報告増が顕著である。

病期別では、早期顕症梅毒(Ⅰ期とⅡ期)が55例、晩期顕症梅毒が1例、無症候が15例であった。

図1 京都市及び全国の報告数の推移

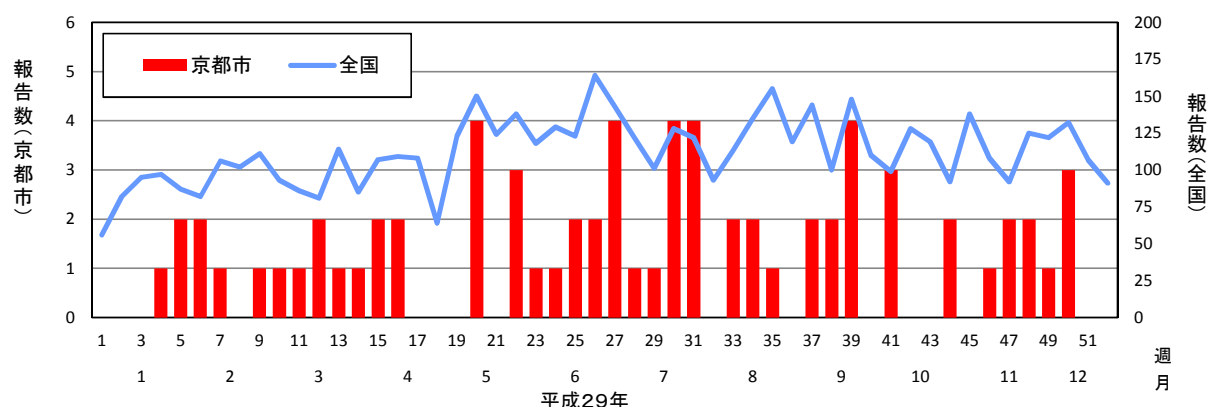
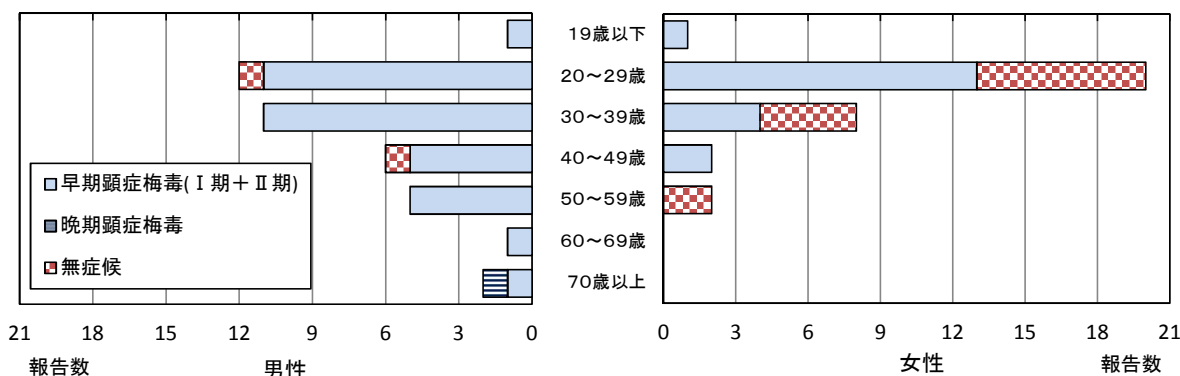


表1 京都市及び全国の年次報告数

		平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
京都市	男性	5	7	9	23	28	38
	女性	3	1	2	15	23	33
	合計	8	8	11	38	51	71
全国	男性	692	993	1,284	1,930	3,189	3,925
	女性	183	235	377	760	1,386	1,895
	合計	875	1,228	1,661	2,690	4,575	5,820

図2 京都市の性別、年齢階級別、病期別の報告数(平成29年)



イ 平成29年 インフルエンザのまとめ

平成28年/29年シーズンは、平成28年第48週(11月28日～12月4日、1.46)に定点当たり報告数が「1.0」を超えて流行期に入り、第4週(1月23日～29日、29.59)にピークを迎えた。その後、第10週(3月6日～12日、7.71)に定点当たり報告数が注意報レベル「10」を下回り、第19週(5月8日～14日、0.65)に「1.0」を下回った。

平成28年/29年シーズンの全国におけるインフルエンザウイルス分離・検出状況は、AH3(77.6%)、B型(18.4%)、AH1pdm09型(4.0%)の順であった。流行開始時からAH3が主に分離・検出されて大半を占める一方、平成27年/28年シーズンに最も多かったAH1pdm09型はわずかに検出されず、B型の割合は終息に向かうにつれて増加した。

平成28年/29年シーズンの京都市の年齢階級別構成は、5～9歳(21.7%)が最も多く、次いで0～4歳(18.1%)、10～14歳(15.2%)の順であった。

また、平成29年/30年シーズンの流行は、平成29年第48週(平成29年11月27日～12月3日、1.06)に定点当たり報告数が「1.0」を超え、前シーズンと同様に早い流行期入りとなった。第3週(1月15日～21日、38.96)に警報発令の指標「30」を上回ったため1月25日に京都市保健所がインフルエンザ警報を発令した。その後、第5週(1月29日～2月4日、47.64)にピークを形成、第11週(3月12日～18日、6.80)に「10」を下回った。なお、全国のインフルエンザウイルス分離・検出状況は、平成30年6月29日現在、B型(46.0%)、AH3型(31.2%)、AH1pdm09型(22.8%)の順になっている。

図1 京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

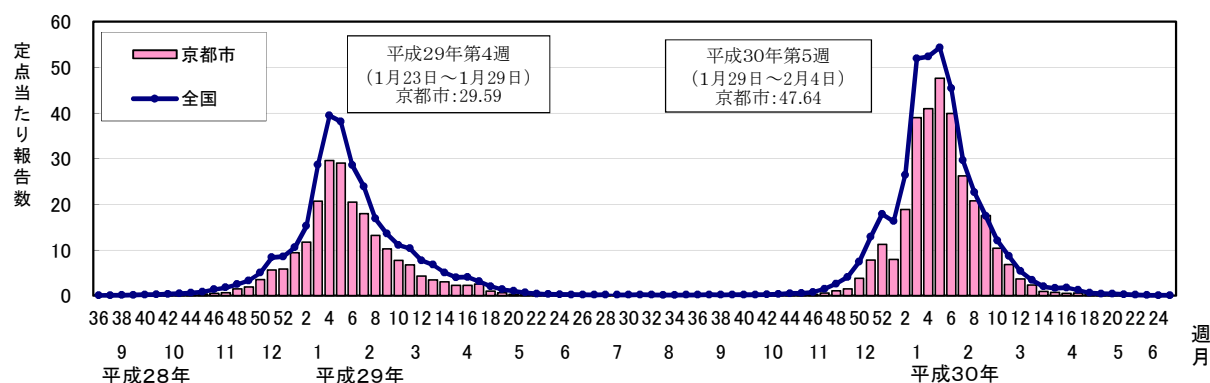


図2 全国のインフルエンザウイルス分離・検出数の推移

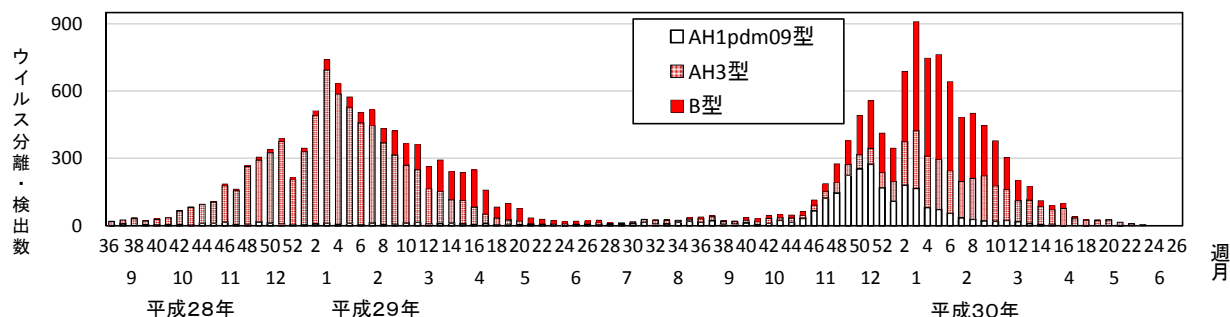


図3 京都市及び全国の年齢階級別割合

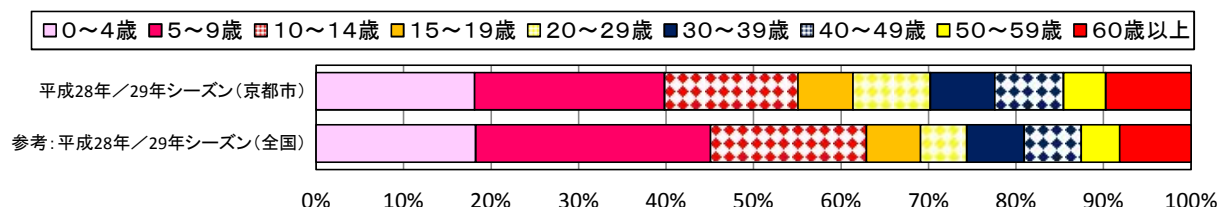


表1 京都市の過去5シーズンの流行状況

シーズン	H24/H25	H25/H26	H26/H27	H27/H28	H28/H29	H29/H30
「1.0」を上回った週	第1週	第52週	第49週	第2週	第48週	第48週
ピーク時の 定点当たり報告数 (ピークの週)	31.22 (第5週)	37.19 (第5週)	28.63 (第52週)	32.82 (第7週)	29.59 (第4週)	47.64 (第5週)
「10」を下回った週	第11週	第13週	第7週	第12週	第10週	第11週

ウ 平成29年 RSウイルス感染症のまとめ

平成29年の定点当たり報告数は、例年に比べ早い時期から報告数が増加し、第25週(6月19日～25日、0.07)以降、過去5年平均値及び過去5年平均値+2SD(*)を上回った後、両値を大幅に超える状態が続き、第36、37週(9月4日～17日、ともに2.81)に最大の報告数となった。全国の定点当たり報告数も同じ第37週(9月11日～17日、3.34)にピークを迎えた。本市の過去5年の定点当たり報告数と比べると、最も早い時期にピークを迎えている。本疾患は秋から冬にかけて流行するとされていたが、近年、夏頃から増加する傾向がみられる。平成29年はこの傾向がさらに顕著に見られた。

年齢階級別では、1歳が38.3%で最も多く、次いで1歳未満34.7%(0～5箇月14.9%、6～11箇月19.8%)となり、1歳以下が73.0%を占めた。この割合については過去5年間の本市及び平成29年の全国の年齢階級別割合と比べても大きな違いは見られなかった。

(*)SDとは標準偏差のことで、データのばらつきの大きさを示す尺度である。下のグラフにおいて、棒グラフ(定点あたり報告数)が実線の折れ線(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年間の当該週と比較してかなり多いことを意味する。

図1 京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

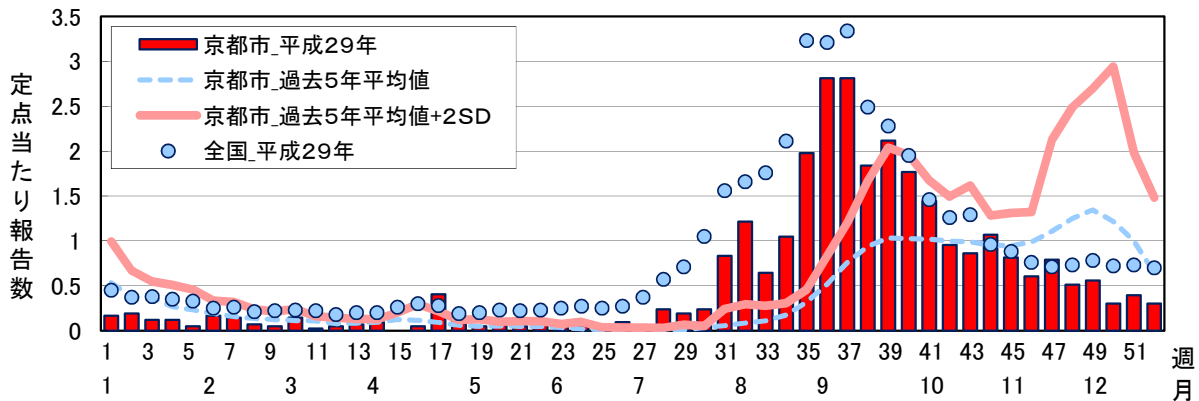


図2 京都市の過去5年間の定点当たり報告数の推移

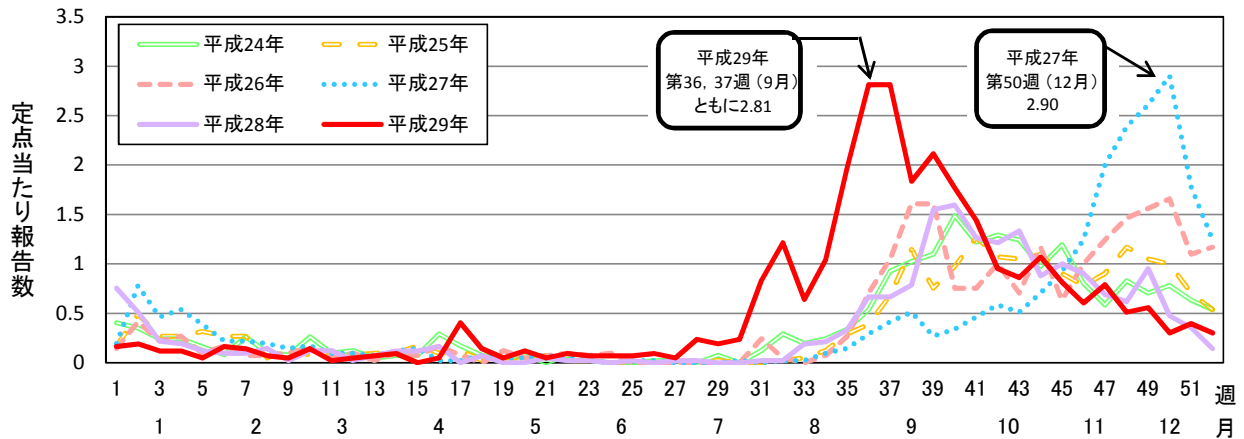
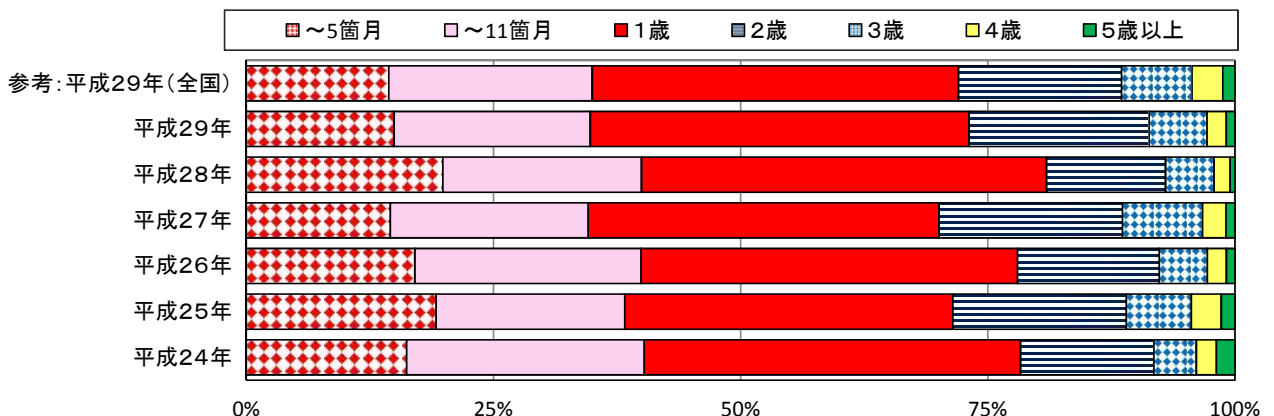


図3 京都市の年齢階級別割合の年次推移



エ 平成29年 手足口病のまとめ

京都市における平成29年の定点当たり報告数は、第12週(3月20日～26日, 0.17)から過去5年平均値及び全国の定点当たり報告数を上回って推移し、第28週(7月10日～16日, 6.67)にピークを迎えた。全国の定点当たり報告数はこの後さらに上昇し、第30週(7月24日～30日, 9.82)にピークを迎えており、本市の流行が他の地域と比べ、若干早い傾向となった。また、本市の過去5年の定点当たり報告数の推移と比べても、流行期前半は過去5年間で最も報告数の多かった平成27年を上回って推移しており、今年の本市の流行が例年に比べ、早い時期から始まっていた。

年齢階級別では、1歳(42.6%)、2歳(20.7%)、6箇月～11箇月(12.9%)の順となり、過去5年間の本市及び平成29年の全国の年齢階級別割合と比べ、好発年齢の2歳以下の割合が最も高かった。

図1 京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

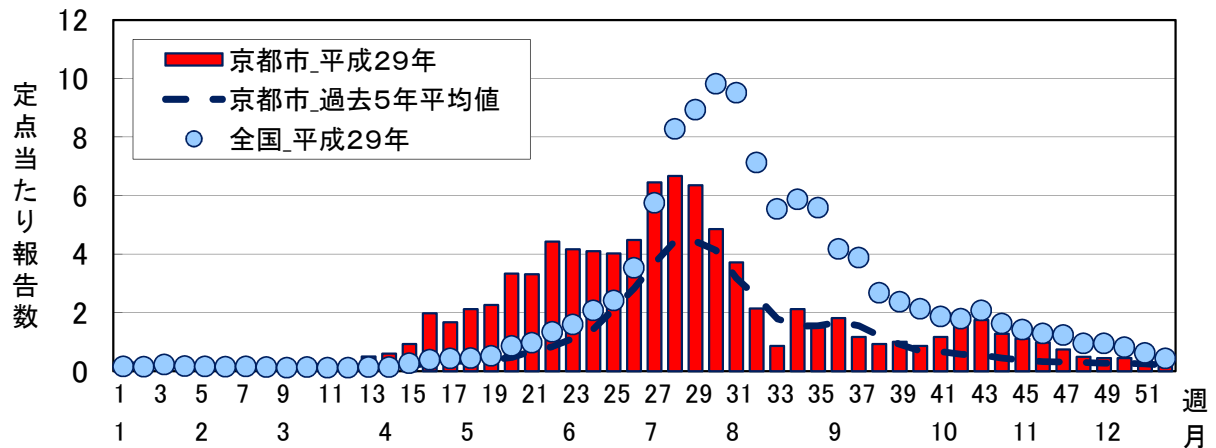


図2 京都市の過去5年間の定点当たり報告数の推移

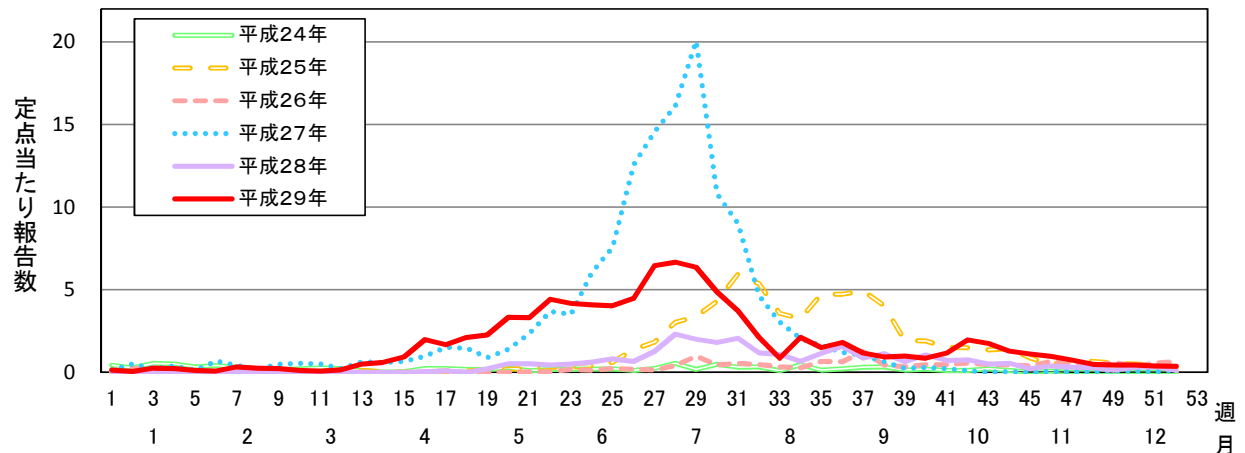


図3 京都市の年齢階級別割合の年次推移

